に似ん事を欲せざれ共、天然と形を同じうする物か、其用をなす事物を摺こなすの器也、其こなすに摺鉢のみにては能せず、摺小木といふ物有、其性木を以て作る、山椒の木を上品とす、其形先丸くふとく、長く大いなる松茸に類せり、是を以かの摺鉢に入れて物を摺こなす、左右へめぐる事天地の如く、こねかへす事逆鉾に似たり、其音どろ〳〵ぐわら〳〵として、地を出る雷の如し、それ雷の百里に震ふ、陰陽相せまりて鳴る、其音陽の音にもあらず、又陰の音にもあらず、水火相合て其間に音有り、摺鉢のぐわら〳〵する、摺鉢の音にもあらず、又摺小木の音にもなし、摺小木摺鉢相摺て其間に音有、能こね能まわりて、其間よく和らぎ、能其物をこなし其用を調ふ、君臣父子夫婦兄弟朋友の上下和し、むつましく事調ひ、用をなすも又かくの如し、君父夫兄朋是を以摺小木とす、臣子婦弟我是を以摺鉢とす、摺鉢先物を受て摺小木是に交り、其間能和し能廻り能こねて其用をなす、あゝ天地の心、陰陽和合の道、摺鉢摺小木の間にも又明らか也、是を不測の妙とやいはむ、

〔鶉衣前篇上〕摺鉢傳

備前のくにゝひとりの少女あり、あまざかるひなの生れながら、姿は名高き富士の保にかよひて、片山里に朽はてん身を、うきものにや思ひそみけん、馬舟の便につけて遠く都の市中に出て、去るよしある店先に、去ばしたづきをもとめけるに、師走の空いそがしく、木の葉を風のさそひ盡す比は、世も煤掃のふるきをすて、物みな新器を求るにつれて、ある臺所によき口ありて、宮仕の極がてら、摺木と聞えしもとに、うち合せの夫婦とはなりける、かれは柏木の右衞門にも似ず、松木のあらくましき男ぶりながら、少もかざりなき氣だてのまめやかなれば、女も心に蓋もなく、明くれいそがしきつとめも、おなじ心にはたらきて、とろゝ白あへの雪いたゞくまで、糊米のはなれぬ中とねがひ、水もらさじとはちぎりけるに、その比せつかひといひしをのこは、檜のき